

## 27-1 臨床心理

## 透析中断を選択した70代女性と臨床心理士との面接過程

1 富家千葉病院 臨床心理室, 2 富家千葉病院 人工透析外科

いたがき ひとみ

○板垣 仁美 (臨床心理士)<sup>1</sup>, 矢野 清崇<sup>2</sup>, 影原 彰人<sup>2</sup>

## 【問題と目的】

透析治療の継続の判断は昨今大きな問題とされ、適切な支援が求められる。当院にて透析中断を選択した症例について、多職種チームの中で臨床心理士 (CP) が行った介入とその経過を報告する。

## 【症例】

Aさん、70代女性

既往歴：X-25年 腎硬化症 X-12年 末期腎不全にて透析導入 X-5年 脳梗塞にて右上下肢の麻痺と軽度高次脳機能障害が残存。当院回復期リハビリテーション病棟から療養病棟に転棟。

家族歴：夫とは中年期に死別し身内はきょうだいのみ。

## 【経過】

X年 透析用内シャントの閉塞のため手術を行うも、再度トラブルが発生。再手術が必要になったが拒否し、透析中断の希望が聞かれる。気分の落ち込みも強くCP介入。透析や医療に対する不安や怒りが強く不安定な状態であったが、多職種チーム・本人・家族との話し合いを重ね透析治療中断が決定すると精神面は安定した。面接の中では自身の人生について振り返りを行っていった。「話すことで自分自身と向き合ってるなって感じなの。色々あったな、ありすぎたなって思うけど、後悔はないんだ。」と自身の人生について肯定的な再評価を行い、自分自身が生きた価値を見出していった。中断から約2週間でAさんは永眠。その後多職種チームによる振り返りを行った。

## 【考察】

人生の肯定的な再評価に至った背景には、入院生活が余儀なくされ生活の基盤が他者や環境によって決められているという受動的な治療の中で、透析中断という人生の決断を自分自身が能動的に行えたことが大きく精神面の安定をもたらしたと考えられる。また、透析継続の判断には人生を再考する視点への配慮が必要であり、本症例では本人の意思を受け止める聞き手としてCPが機能し、自己受容へとつながっていったと思われた。

透析中断は医療者にとっても心理的負担が大きいことから、振り返り等チームでの共有を行い心的負担を軽減するなどその後のフォローも重要である。

## 27-2 臨床心理

## 透析スタッフへのストレスケア～抑制ゼロを継続していくために～

1 富家病院 透析室, 2 富家病院 臨床心理室

あかし りさ

○明石 理沙 (看護師)<sup>1</sup>, 尾熊 慈恵<sup>1</sup>, 寒河江 奈央子<sup>1</sup>, 三輪 加奈子<sup>1</sup>, 山本 恵<sup>2</sup>, 根生 一治<sup>2</sup>

## 1.はじめに

当院は抑制0%を継続しており、すべてのスタッフが協力し患者対応を行う環境となっている。透析室でも職種関係なく対応しているが対応困難となるケースがあり、日々情報交換を行いながら対応にあたっている状態である。

## 2.目的

認知症や透析に対し理解が乏しい患者への対応を日々行っているうえで、その対応を行っているスタッフはどのような心理状態なのか、少しでも改善できることがあるのか検証するため研究を行った。

## 3.研究①

透析スタッフ職種・役職関係なく全員を対象に困難ケース事例と良いと思った対応について自由記載アンケートを実施。

## 4.結果①

記述式アンケートにおいて対応困難ケースに関しては不穏や暴言のある患者や意思疎通が困難な患者に対し接し方が分からずストレスになっていることが分かった。また臨床心理士の対応が良いと思っているスタッフが多いことも分かった。

## 5.研究②

透析スタッフでは困難なケースでも臨床心理士が介入することで透析可能な状態に改善するケースを経験していることが判明。そこで、臨床心理士に認知症をかかえた透析患者の理解と対応方法について知識を深められるように勉強会を依頼。勉強会前後でスタッフの心理状態に変化があるか評価するためTMS (一時的気分尺度)を測定した。

## 6.結果②

勉強会前後のTMSと感想記述を確認すると勉強会前に比べ認知症患者への理解が深まり対応に対する困難感や不安感が軽減されたとの記載が見られ、TMSでは気分の改善を認めることができた。

## 7.まとめ

勉強会后正しい対応方法を学び実践することでストレスの軽減につながったことが分かった。さらに、スタッフからより具体的に患者との関わり方を学びたいとの前向きな意見が出てきた。そのため今後も臨床心理士への勉強会依頼や必要なら様々な職種からの勉強会を適宜開催していきたいと思う。

## 27-3 臨床心理

## 高齢透析患者の思いを傾聴して明らかになったこと

くすの木病院 透析センター

こんどう たかこ

○近藤 貴子（准看護師），秋山 いづみ，加藤 一恵，丸山 秀樹

## 目的

高齢透析患者は、高齢での透析導入、老化や腎臓病、透析療法の合併症によって引き起こされる身体機能低下、自力通院が難しく送迎車なしでは通院できないなど様々な不安や悩みを抱えていることが考えられる。透析看護ではこの患者の思いを理解し、これから先どうありたいかなどを知ることが重要であると感じた。そこで当院透析患者は何に対し不安を持ち、どのような思いで治療を受けているのかを明らかにした。

## 方法

- 1) 研究期間：2019年8月～10月
- 2) 研究対象：研究同意の得られた75歳以上の当院透析患者 男性19名、女性10名
- 3) データ収集方法：身体的・経済的・精神的・社会的について不安や悩みはないか、透析を受けている時間内にベッドサイドにて聞き取り調査を行う

## 結果

身体的不安心配なし 9（男性 5 女性4）あり 20（男性14 女性6）  
経済的不安心配なし 20（男性11 女性9）あり 9（男性 8 女性1）  
精神的不安心配なし 18（男性10 女性8）あり 11（男性 9 女性2）  
社会的不安心配なし 18（男性11 女性7）あり 11（男性 8 女性3）

## 考察

高齢透析患者の心理や精神症状は、「高齢者」「透析患者」という二重のストレス状態にあり多くの不安や悩みを抱えているのではないかと思っていた。しかし今回の結果では精神的、社会的、経済的では不安悩みはないと答えた患者の方が多かった。これは患者自身が人生を振り返り満足している、または、ありのままを受け入れられることで「透析に安心して通い続けられる」と思えるようになったと考える。男女の比較でみると、男性は不安悩みなし、ありの差がほとんどない結果であった。これは夫婦の役割分担として男性は「稼ぎ手」としての意識がまだ強く影響しているためと考えた。

## 結論

透析療法は患者が最期を迎える時まで続く治療であるため、今後も患者それぞれの人生の中で経験してきた事を尊重しながら、患者の抱えている不安や悩みを傾聴し必要としている看護を提供していく。